

生活スタイルの模索

世界とつながる市民生活

近年、インターネット、携帯電話などいわゆるIT（情報技術）の普及が急速に進んだことで、個人が国境を超えて世界とつながることができる時代を迎えた。また、現在の市民生活は、資源や廃棄物を通して、否応なく地球とつながる時代となった。そして、地球規模の環境問題が、個人の生活と直結した形で表れている。地球温暖化や大量生産・大量廃棄社会によるごみ処理システムの問題などは、個人の生活スタイルに問いを投げかけ、地域社会では解決に向け多様な試みが模索されている。

市民生活のIT化の実態 —— 高まる情報機器の利用率

21世紀の市民の生活のスタイルを形づくる大きな要素の一つとして、インターネットや携帯電話などの情報機器の普及がもたらすコミュニケーションや人間関係の変化があげられる。

平成9年から12年の3年間で、市民の情報通信機器の利用率は大幅に上昇した。

特にインターネットを利用している人は、平成9年の18%から平成12年には38%に倍増し、自宅でのインターネットの利用も3割を超えている。

市民の携帯電話、パソコン、インターネットの利用率は全国平均、大都市平均を上回り、市民生活へのITの浸透度は全国でも上位の都市であるといえる。特にインターネットは若い世代ほど利用率が高く、特に20代では携帯電話からの接

続がパソコンからの接続を上回り、いわゆる「モバイル」（移動型情報通信機器）を積極的に使いこなす若い世代のライフスタイルが浮かび上がる。

IT化による生活の変化 —— 時間・場所を超える コミュニケーション

市民生活のIT化の進展によって、時間や場所の制約を受けることなく双方向

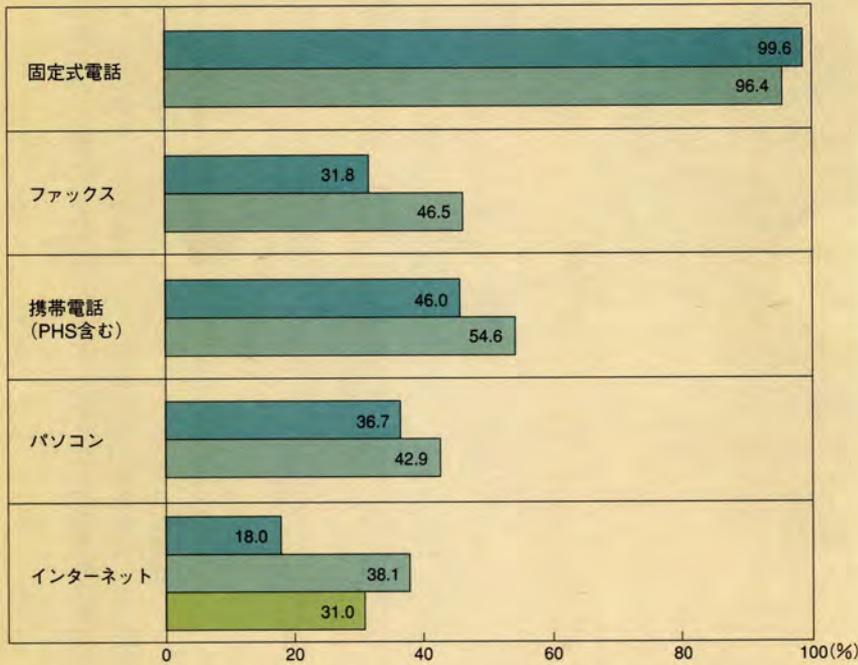
の情報のやりとりや買い物を行うことなどが可能になってきた。

また、IT化の進展は、人と人との関係のあり方や結びつき方も変えていく。これまでの人間のコミュニケーションは、主に場所や空間を共有することによる、文字通り「地縁」にもとづくものが主流であった。しかし、IT化の進展により、地縁だけではなく、インターネットによって、自宅に居ながらにして世界中の人



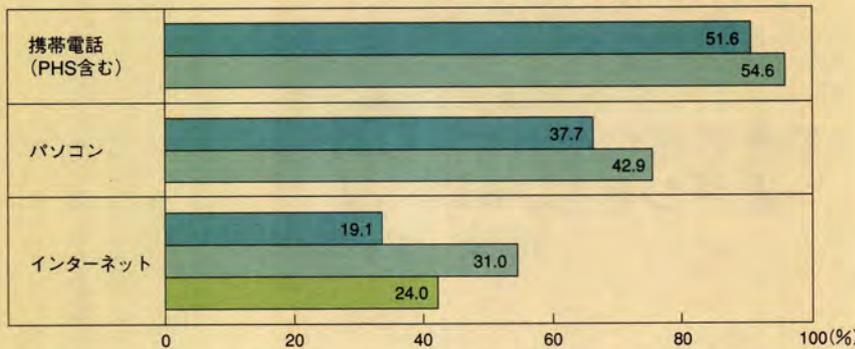
●市民の情報機器の利用状況<平成9年と平成12年の比較>

■電話は回線保有率、ファックス、携帯電話、パソコンは個人所有率。
インターネットは個人利用率(職場、学校等を含む)
高度情報通信社会現況把握基礎調査(企画局・平成9年3月/サンプル数:1355)
■インターネットの■以外は、個人利用率(仕事で利用している場合を含む)
平成12年度市民意識調査(サンプル数:2169)
■インターネットの自宅での個人利用率
平成12年度市民意識調査(サンプル数:2169)



●携帯電話、パソコン、インターネットの利用状況

■インターネットについては、世帯普及率
通信白書(全国平均・平成11年11月調査)
■インターネットについては、自宅での個人利用率
横浜市(平成12年度市民意識調査/サンプル数:2169)
■=東京23区、政令指定都市、県庁所在地
通信白書(大都市の平均・平成11年11月調査)



との意見交換や、情報収集が可能となり、市民の交流空間は広がりつつある。

また、これらのITメディアは、個人が必要な時に情報の交換を行える環境を作る。インターネットのコミュニティ・サイトなど、同じ関心を持つ人同士がわざわざ出かけなくても情報ネットワークによって自由に意見交換できるなど、個人の参加・発信型コミュニケーションの

輪を広げられる有効なメディアとしての可能性が大きい。

その一方で、IT普及に伴う影の部分
が心配だという声も聞かれる。誰が発信・受信しているのかわからないという不安があり、その匿名性によって無責任な状態が生じている。迷惑メールを一方的に送りつけられる事例や電子メールを利用した犯罪も増えている。インター

ネット上での個人情報などプライバシーの保護の問題や、ウイルスに汚染された電子メールなどの不安もある。

また、インターネットや電子メールでのつながりは、同じ関心を持つ人同士の断片的な結びつきとなり、世代や関心を異にする人同士の結びつきを弱める、という側面も指摘されている。
生活の一つの手段としてインターネット

トなどITを上手に使いこなしていくために、社会的なルールづくりや教育が必要となっている。

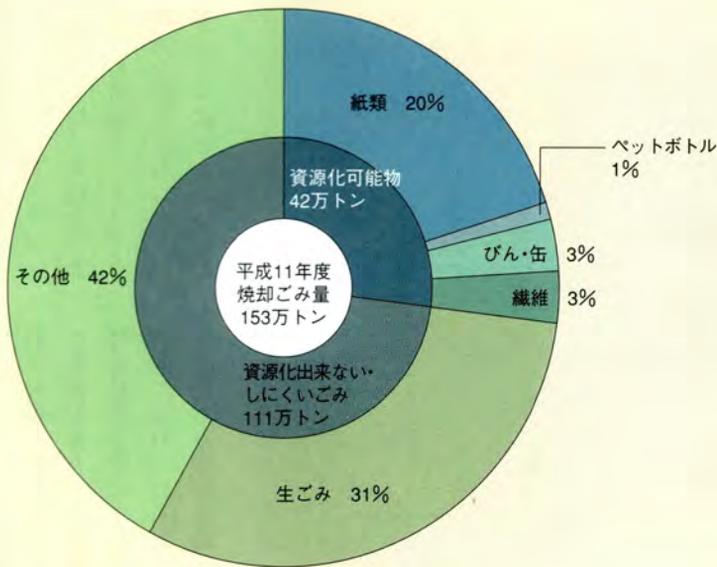
循環型社会に向けた「生活スタイル」の転換へ

資源・環境問題を介して地域や市民の生活が否応なく世界とつながる現在、限られた資源の活用や環境保全は市民一人ひとりのライフスタイルのあり方が鍵となる。資源を消費し、ごみとして廃棄していくだけの地域から、資源の消費量を抑制し、廃棄物を減らし、再活用できる資源を増やして、有限な資源が次の世代にまで受け継がれていく「循環型社会」が成り立つ地域としていくことが求められているといえる。

横浜市の焼却ごみ量に占める資源化可能物の比率はなお4分の1を超えるなど、資源の有効活用や環境保全に向けた意識や生活のスタイルを、より向上させていくことが求められている。

そのような中、有限な資源の活用や環境問題に対する市民の意識や取り組みも高まりを見せている。家庭からの排水の配慮や外出時のごみの持ち帰り、びんやプラスチック容器の再利用、使い捨ての物は使わないようにする、リサイクル商品の利用、省電力、マイカーの利用控えなど、身近な生活の中で資源を大切にしたり、ごみの廃棄量を減らすなど、環

●焼却ごみに含まれる資源化可能物の組成推計



資料:「横浜市環境事業概要」及び「廃棄物資源開発室調査結果年報」をもとに作成

境に配慮した生活のスタイルをとりとうとする市民の姿が浮き彫りになっている。「循環型社会」の確立を目指し、またグローバル化する21世紀において地域社会での生活の質を高めていくためには、「会社人間」的な生活や、私生活のみを優先

するライフスタイルでは、市民として地域づくりを十分に担っていくことはできない、ということも指摘されつつある。資源利活用や環境保全のために、有効なまちのシステムを確立していく必要があることはいうまでもない。あわせて、

グローバルに開かれた21世紀の地域には、高度情報社会化や人間関係の都市化の中で、変わりつつある市民の価値観や生活作法をふまえ、新たな地域運営のルールを確立していくことも重要だといえる。こうした新たな地域運営を実現してい

くために、市民一人ひとりの人生設計や生活における時間配分、地域づくりに活かせるキャリアや経験など、個人の資源配分をも含めて、生活のスタイルのあり方を見直していくことが求められているといえよう。

Interview

インターネット・ビジネス主宰 校條 諭さん(金沢区在住)

IT化と近隣社会
IT化で見つめ直す
近所づきあいの
意味

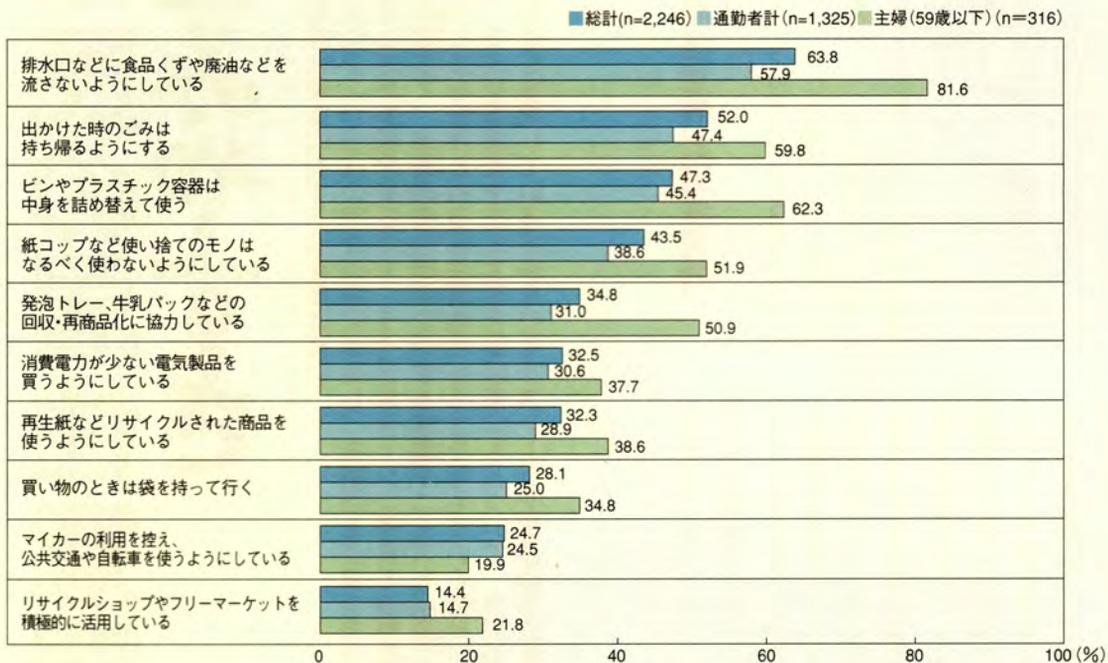


「IT(情報技術)は人間関係を断片化する。インターネットでよく使われる言葉に、「COO(コミュニティ・オブ・インタレスト)」というものがあります。自分の関心、自分の好きなテーマで人と人が集うということ。インターネットを使ったりすることで、例えば旅行が好きだという人は地域を越えて、あるいは世界中の人とネット上で集いを持ってお互いにコミュニケーションを持つことが可能なわけですね。極端な話、地域においては自分の個室の中で、周りとのつきあいをほとんど持たないまま、イ

「地域」の価値を見直す
これに対して地域というのは、お祭りなどの場合が特にそうですが、世代も年代も違う人が直接出会う、関心を異にする人が直接出会うことのできる場です。お隣さん、同じマンションに住む人は自分が選んだわけではない。もしかしたら「考えが合わないな」とお互い思いつつも、隣に住むわけですね。物理的に隣に住んでいると多少なりとも接触が生ずる。もしかすると我慢しなければいけないかもしれない。あるいはインターネットで自分が好きだというだけで選んでいた範囲では気づかないことに気づかされるかも知れない。それが地域では具体的にいろいろな人に出会ってしまう、そういう場であることの価値が明らかにあると思います。

インターネット上でのみ自分の趣味の友達とつきあうということができてしまうわけです。あるいは携帯電話で家や地域の外の人間とだけおしゃべりすることもできるでしょう。そのこと自体は非常に便利なことですが、関心を持たない世界への無関心、ということが起こっています。インターネットの中には自分が寄り添う場所が非常に断片的なカタチであるので、「ライフスタイルの飛び地」という呼び方をする人もいます。そういう現象が今起きてきているのがインターネット上のコミュニティや、人の結びつき方の現象だと思えます。

●市民が行っている環境保全・リサイクル活動の内容



資料:「市民生活行動調査」(平成12年度)

Interview

京都大学経済学部教授・横浜市ごみ減量化アクションプログラム検討委員会委員長 植田和弘さん

必要なのは「循環型社会をつくる時間」

ライフスタイルと直結するごみ問題



ライフスタイルと消費の関係

ドイツと日本の家庭から出るごみの違いを調べてみたところ、日本との対比で非常にわかりやすいのは、ドイツには食品用のトレイなどが全くない、いわゆるプレパッケージに当たるものがほとんど出てきません。ドイツは瓶をよく使うので、発生するごみの重さでいうと結構重いんですが、容積的にはすくなくあります。

日本も30年前にはパッケージがあったわけではなく、急速に変わったのです。ドイツのリサイクル・システムが進んでいるという話

をよくしますけれど、むしろ昔ながらのスタイルを守っているのだといえます。商品の売り方の面でも、量り売りやバラ売りが当たり前なのです。

お店での売り方が変わらないのに、消費者だけが突然変わることはありません。これからは、環境に配慮した販売形態やスーパーを地域でつくるといったことを、市民が中心になってやるべきだというのが私の考えです。

「循環型社会をつくる」「地域環境保全時間」

日本の容器包装のごみは流通の過程で増えます。つくったときに容器包装をするのは中身を保護するという意味ですが、流通の過程でも増えていくのが特徴です。これがプレパッケージを考えるときのポイントです。

ドイツの人に比べると日本人は忙しく、統計的にも年間労働時間は約4000時間長い。使い捨てというのは結局、時間を節約するという動機がものすごく大きいわけです。

朝早く出かけて、夜遅く帰ってくるような生活だと地域の環境は考えられません。地域の空間と時間を環境のために使わないといけない。生活の時間を働く時間と区別して、地域環境保全時間が必要なんです。お金を出すだけではなく、これからは自分の時間も出さないといけない。地域のコミュニティが悪くなければ不法投棄も起こりやすくなるので、同時にコミュニティづくりも行おうような単位が非常に大事になってくるわけです。

循環型社会をつくる仕事というのは、市民や行政だけではなく、事業者もその地域で営業している限りはそのための時間をつくってもらうないといけない。それを有機的につなげるようにしていく新しいルールが必要だと思っています。